これは私がある雨の夜に、パソコンを拾ったことから始まる話だ。
私自身、あのことについては未だに半信半疑、ほんとに現実にあったことなのか、情けないことに、信じ切れないままでいる。
ただ、本当のことだったらいい、とずっと、思っている。
だからこうして書き残しておこうと思う。
私が忘れてしまう前に。
私が忘れてしまった時のために。
私の元にやってきた、妹子というプログラムのことを。
妹子という、パソコンの中にいた友達とのことを。

◆

そのパソコンを拾ったのは、信号待ちの交差点で派手にトラックに水を被せられた後だった。ぼうっとしていて、避けることさえできなかった。
もっとも、気付いていてもそのまま、棒立ちだった可能性も高いけど。
疲れていた。その頃はなぜか悪いことばかり続いていた。仕事では他のプロジェクトの責任を取らされてリーダーを下ろされたし、プライベートではパソコンが壊れて困っていた。
仕事なんて別にどうでもよかったけど。別にどうしてもやりたかったわけじゃないからよかったんだけど。
パソコンだって優先事項は低かった。他にも家電が次々不具合を起こして費用に余裕がないところだったし、別になくても困らない。
仕事は出来なくなるけど。別に持ち帰ってまでやらなくたって。
怒られるかもしれないけど。
でももうその時には何もかも、どうでも良いとしか思えなかった。
傘も持っていなかったから、全身ずぶ濡れのまま、水を吸ってすっかり色の変わったスーツを見下ろして、クリーニングに出さないと、なんて思っていた。
もう一着はちゃんと受け取ってあったかなんて考えていた。明日着る分はあったかなって、そんなこと。
ぼんやり考えながら、いつも通り抜ける空き地のすみ、乱雑に、積み上げられたごみ山の中に見つけたのだった。
四角い箱をくり抜いて、画面を埋め込んだみたいな。
ちょっとださくて古臭い、デスクトップ型のパソコンを。
いらないと思ったばかりなのに魅入られたのは、こんな雨の中、折れた傘や傷だらけのサーフボードがうまいこと重なって、難を逃れていたからかもしれない。
私よりもよっぽどこいつの方が、運がいいように見えてしまった。

だから、何だか欲しくなってしまったのだった。
持ち帰ってもし動かなければ、やはり壊れてるならまた元に戻しに来たらいいだけだ。
気が付けば一人暮らしのマンションまで走っていた。下駄箱をひっくり返して、埃まみれのカッパを一つ見つけて掴み出す。
また傘も差さずに道を引き返して、丁寧にくるんで持ち帰ったのだった。
壊れたパソコンの代わりに机に乗せると、不思議と部屋に似合っているように見えた。
初めからそこにあったみたいな自然さで、そのパソコンは、私の部屋の住人になったのだった。

拾ってきたパソコンはコンセントを差し込むと期待通り、意外にも、問題なく起動した。
パスワード画面には慌てたが、数字やアルファベットを適当に並べた末、苦し紛れにいつも使ってる文字列を入力したら通ってしまってぽかんとした。
これはいよいよ運が向いてきたのかもしれないと、早速浮かれそうになる内心を、いやいやまだわからないぞ、となだめるのが大変だった。
一通り確認したところ、パソコンの中身は空っぽだった。簡単な画像や文字入力ソフトやゲームの他には何も入ってなくて、どうやら初期化されているようだった。

ためしに持っていたソフトウェアを入れてみたらこれもまた問題なく動作して、そこでようやく、一息つけた。
とりあえず風呂に入ることにしたのだった。これで風邪でもひいたら目も当てられない。
濡れたスーツはどうせクリーニングに出すからと、玄関先に脱ぎ捨てて、熱いシャワーを頭からかぶって、両手で顔を擦って長くため息を吐く。
もしかしたら今日の私はめずらしく、運が良かったのかもしれないってようやく思うことができたのだった。
雨には降られたけど。スーツもダメにしたけど。だけどあのパソコンは良い拾い物だったかもしれない。
少なくとも新しいものを買うまでのつなぎとしては、十分そうに思えていた。
そしたら次はネットの設定をして、など、頭の中で色々算段をする。

生き返った心地でリビングに戻ってきた私は、ほくほくと、着けたままだったパソコンの画面を覗いてみた。
見覚えのない新しいウインドウが開いていて、何だろう、と読んでみると、どうやらソフトウェアの試用の案内らしかった。
期間は九十日間。名前は『ASUKA』。
聞いたこともない名前で、見たこともないロゴだった。
私の知らないソフトウェアだった。

検索しようとして、ネットに繋いでいないことに気付く。
「……まいっか」
深く考えずに、先に進んだ。規約を読み飛ばして承認し、インストールをクリックする。
じわじわと増えていくカウントを眺めていると、画面に反射した私が遅れて首をかしげていた。
これはどこからダウンロードしているんだろう。
それともあらかじめ、インストーラーが入っていた？
そんなもの、さっきまであったっけ？
思い出す前にあっけなく、作業は終了してしまった。
ぽこん、と間抜けな音を立てて、何かがデスクトップに現れた。

現れた。
表示された、というよりも、まさに現れたと言った方がしっくりくる様子だった。
それくらい確かな存在感を、その男は持っていた。
浅い緑色の和服と、寝癖みたいに跳ねた薄茶の短髪の男。
ふわ、と風でも舞うように、その服の裾がはためいた。
ゆっくりと降り立つように足が動く。その足元の影が動く。
伏せられた目が開かれて、髪と同じ薄茶の目が真っ直ぐ向けられた。
こちらに。
しっかりと、焦点を結ぶように。何度か瞬きを繰り返して。
確かに、そいつは画面ごしの私を見ていた。
「初めまして、こんにちは。僕は、妹子です」
はっきりとした、芯の強い声が聞こえてくる。
私は動けないまま、それを見つめた。
「これからあなたのサポートを務めさせていただきます。まず初めに、あなたのお名前を教えてください」
まだ、私は動けない。
「お名前は？」
「私は……」
何が起こっているのかうまく考えることができなかった。
ただ、促されるまま、答えていた。

「私の名前は、太子、だよ」
「太子……」
ほんの少し、考えるような素振りをして。
妹子は不遜にも見えるほど、力強く微笑んだ。
「太子。どうぞよろしくお願いします」

それが、私と妹子の最初。
ひどくツイてなかった私が、妹子と名乗るプログラムと、出会った夜のことだった。